

第2問 「公共」の授業のまとめとして，生徒**A**の班は，「現実社会の諸課題の解決に向けて，人と人とが対話や議論をする公共空間を持続的に形成するには，どのようなことを考えるべきか」という課題を設定し，探究活動を行った。次の問い(問1～4)に答えよ。(配点 13)

問1 生徒**A**の班は「公共」の授業で，公共空間の形成に関して，次の**先生の説明**を受けた。**先生の説明**中の空欄 **ア** ～ **ウ** に入るものの組合せとして最も適当なものを，後の①～⑧のうちから一つ選べ。 **5**

先生の説明

「公共空間」とは，「人間同士のつながりや関わりによって形成される空間」を意味する。そこでは，人々が主体的に参加し，互いの意見を尊重しながらこの空間を形成していくことが期待されている。

『コミュニケーション的行為の理論』という著書のある **ア** によれば，公共空間では対等な立場で自由に意見を交わすという共通理解のもとで，合意を形成していくことが大切であり，そのような合意形成には **イ** が必要である。

また別の哲学者は著書『人間の条件』で，人間の営みを「生命を維持するために必要な営み」である「労働」，「道具や作品などを作る営み」である「仕事」，「人と人とが **ウ** 営み」である「活動」の三種類に分け，三番目の「活動」こそが公共空間を形成する，と論じている。

- | | | |
|-------------------|-----------------|----------------------|
| ① ア アーレント | イ 対話的理性 | ウ 言葉を通して関わり合う |
| ② ア アーレント | イ 対話的理性 | ウ 契約を結んでこれを守る |
| ③ ア アーレント | イ 他者危害原理 | ウ 言葉を通して関わり合う |
| ④ ア アーレント | イ 他者危害原理 | ウ 契約を結んでこれを守る |
| ⑤ ア ハーバーマス | イ 対話的理性 | ウ 言葉を通して関わり合う |
| ⑥ ア ハーバーマス | イ 対話的理性 | ウ 契約を結んでこれを守る |
| ⑦ ア ハーバーマス | イ 他者危害原理 | ウ 言葉を通して関わり合う |
| ⑧ ア ハーバーマス | イ 他者危害原理 | ウ 契約を結んでこれを守る |

公共、政治・経済

問 2 公共空間の形成についての授業を受けた生徒 **A** の班は、現在の人間同士の関わりについて情報収集することにし、次の**表 1・表 2**を見つけた。**表 1・表 2**の各年齢層とも上段の数字は 2018 年調査の、下段の数字は 2022 年調査の結果を表している。

表 1 「時間のゆとりの有無」(%) **表 2** 「自由時間の過ごし方」(複数回答) (%)

年齢	ゆとりがある	ゆとりがない	わからない
18～29 歳	65.9	34.1	0.0
	64.7	34.8	0.5
30～39 歳	54.5	45.4	0.1
	48.6	50.0	1.4
40～49 歳	52.8	47.1	0.1
	48.1	49.1	2.8
50～59 歳	61.5	38.3	0.2
	56.5	43.2	0.3
60～69 歳	73.7	26.3	0.1
	64.9	31.5	3.6
70 歳以上	85.2	14.3	0.6
	75.4	20.5	4.1

年齢	インターネットやソーシャルメディアの利用(メールや動画視聴を含む)	友人や恋人との交際	社会参加(PTA・地域行事・ボランティア活動など)
18～29 歳	41.7	37.1	2.4
	61.4	46.2	1.1
30～39 歳	33.6	18.6	3.6
	51.9	18.9	0.9
40～49 歳	29.9	15.2	4.4
	45.6	16.8	2.5
50～59 歳	25.9	16.0	5.9
	35.5	15.5	3.9
60～69 歳	16.5	16.2	9.4
	25.3	11.0	5.1
70 歳以上	8.2	18.8	10.7
	13.4	12.7	8.6

(注 1) **表 1** の「ゆとりがある」は「かなりゆとりがある」と「ある程度ゆとりがある」とを合わせた割合であり、「ゆとりがない」は「あまりゆとりがない」と「ほとんどゆとりがない」とを合わせた割合である。

(注 2) **表 1** に示されている数値は、四捨五入している。そのため、各年齢層の合計は 100 % にならない場合がある。

(注 3) 「自由時間の過ごし方」の選択肢は、**表 2** に示しているもの以外に「睡眠、休養」、「家族との団らん」、「旅行」などがあるが、省略している。

(出所) 内閣府「国民生活に関する世論調査」(平成 30 年、令和 4 年調査)(内閣府 Web ページ)により作成。

生徒 **A** の班は表 1・表 2 から，2018 年調査と 2022 年調査を比べた場合の変化を読み取った上で，意見を出し合った。次の意見 **A**～**ウ** のうち，表 1・表 2 を正しく読み取ったものの組合せとして最も適当なものを，後の①～⑦のうちから一つ選べ。なお，表 1・表 2 の読取りに関する部分には下線を付している。

6

A 「時間のゆとりの有無」について「ゆとりがある」と回答した割合が半数を下回るようになったのは「30～39 歳」と「40～49 歳」だ。この二つの年齢層は，「自由時間の過ごし方」として「インターネットやソーシャルメディアの利用」をあげた割合が半数を超えるようになった。新型コロナウイルス感染拡大の影響で，外出の機会が少なくなり，インターネットやソーシャルメディアの利用機会が増えたのかな。

イ 「時間のゆとりの有無」について「ゆとりがない」と回答した割合は，すべての年齢層で上がっているが，上がった割合が 1 ポイント未満だったのは「18～29 歳」だけだ。また「自由時間の過ごし方」として「友人や恋人との交際」をあげた割合に関して，9 ポイント以上増えたのは「18～29 歳」だけで，50 歳以上については，どの年齢層も減っている。「18～29 歳」の人々への新型コロナウイルス感染拡大の影響は，他の年齢層とは異なるのかも。

ウ 「自由時間の過ごし方」として「社会参加」をあげた割合は，どの年齢層でも減っている。だけど「70 歳以上」は，「社会参加」の割合が他のどの年齢層より高いままであり，「時間のゆとりの有無」について「ゆとりがある」と答えた割合も，他のどの年齢層より高いままだ。時間のゆとりがないと，社会参加は難しくなるのではないだろうか。

- | | | |
|-----------------------|-----------------------|----------------------------------|
| ① A | ② イ | ③ ウ |
| ④ A と イ | ⑤ A と ウ | ⑥ イ と ウ |
| | | ⑦ A と イ と ウ |

公共、政治・経済

問 3 探究活動の成果を授業で発表する上で対話の力に注目した生徒 **A** の班は、哲学対話を実践している哲学カフェに参加し、参加者たちの発言を記録した。参加者たちの次の発言 **I** ～ **III** のうち、帰納的に推論されているものの組合せとして最も適当なものを、後の①～⑦のうちから一つ選べ。 7

I

哲学カフェの参加者にも、話し合うときの態度はいろいろあるけど、お互い安心して話せるように、穏やかな態度で相手の発言を最後まで聞き、よく考えてから発言するように取り決めたところ、対話が活発にできるようになった。これらの事実が何度もあったことから、活発な哲学対話は、安心して話せる取り決めがあれば可能になるという経験則が導き出せるね。

II

人間には、自分の考えや意見を自由に述べる権利があり、お互いに認め合い尊重し合う義務がある。そうであるならば、哲学カフェに限らず、職場でも学校でも、参加者がお互いに、相手には自由に発言する権利があると考え、相手の話を尊重して最後までしっかりと聞くことを、対話のルールにしなければならないことになるね。

III

哲学カフェに初めて参加した人が素朴な質問をしてくれると、これまで繰り返し問うてきた問題に新たな光が当てられて、問いが深まった。そんなときに、対話のおもしろさを感じられた。同じ実感を他の参加者たちももっていた。これらの経験を基にして、どんなに素朴であっても、率直に質問や疑問を出し、問いを深めていくことが哲学対話の方針になったんだよ。

① **I**

② **II**

③ **III**

④ **I と II**

⑤ **I と III**

⑥ **II と III**

⑦ **I と II と III**

- 問 4** 生徒 **A** の班はこれまでの探究活動の成果を踏まえ、公共空間の持続的形成について、対面と非対面という点に着目して**構想メモ**を作成した。次の**構想メモ**中の下線部①～③の記述と、それぞれに該当する後の事例**ア**～**ウ**との組合せとして最も適当なものを、後の①～⑥のうちから一つ選べ。

8

構想メモ

新型コロナウイルス感染拡大期に、ICT(情報通信技術)が本格的に活用され始めた。例えば①別々の場所にいる人たちが、ICT を使うことで、対面の場に来ることなく、対話や議論に参加できるようになった。これは「非対面的関わりのみのタイプ」である。

また、②今まで対面の場に参加できなかった人が、ICT を使って、対面の場に非対面で参加できるようにもなった。これは「対面的関わりに非対面的関わりが加わっているタイプ」である。

「対面的関わりのみのタイプ」については、例えば③その場にいる人たちが互いに気楽に質問したり、知識や技能を相手の反応を確認しながらていねいに伝えたりすることがしやすい。

非対面的関わりと対面的関わりとのバランスをどのようにとるかが、公共空間の持続的形成にとって課題になってくるだろう。

- ア** これまで対面で実施されていた会議が、事情でオンライン会議に変更されたので、すべての参加者はインターネットで会議に出席した。
- イ** 料理教室に講師と生徒が集まり、生徒は講師から受けた指導に基づいて料理を作り、その場で講師に味見をしてもらい講評を受けた。
- ウ** 身体的な事情のため外出できなかった人が、地元の公民館に集まった人々が行っている対話集会に、インターネットで参加した。

- | | |
|---------------|---------------|
| ① a—ア b—イ c—ウ | ② a—ア b—ウ c—イ |
| ③ a—イ b—ア c—ウ | ④ a—イ b—ウ c—ア |
| ⑤ a—ウ b—ア c—イ | ⑥ a—ウ b—イ c—ア |